



今年もいつもと変わらず、  
素敵な本との出会いがありますように

学校長 小西 俊光



2020 読書週間ポスター大賞作品

10月27日～11月9日の2週間は読書週間です。読書週間は、終戦後の1947年(昭和22年)11月17日に、「読書の力によって、平和な文化国家を作ろう」ということで開催され、今年で74回目を迎えます。左にある今年の読書週間のポスターの作者である、絵本作家、なかい かおりさんから次のようなメッセージが寄せられています。

「思うように旅ができない世の中になってしまいました。本は、未知なる場所へ連れて行ってくれる、いちばん身近な移動手段かもしれません。今年もいつもと変わらず、素敵な本との出会いがありますように。」

コロナ禍で様々な行動が制限されている今年ですが、そんな中でも素敵な本との出会いがあるという、心強いメッセージをいただいたように思えます。

私が小学生だった頃もちょうどこの季節になると、担任の先生から「本を読んだらこの読書の木に実の形のシールを貼ってください。みんなで読書の木にたくさんの実をならせましょう。」とよく促されました。読書があまり好きでなかった私は、ページ数の少ない本を探して読んだり、途中で読むのをあきらめてしまったりしていました。しかし、当時の学習雑誌「科学と学習」の付録だった読み物の冊子にあった「白瀬さんという陸軍中尉が初めて南極探検に挑戦した」という内容の物語に出会い、本の楽しさを知ることができました。この物語を読んでいると自分が白瀬さんと一緒に南極探検をしている気分になり、あっという間に読み終わってしまったことを今でも覚えています。まさに、絵本作家のなかいさんのメッセージにある「未知なる場所」へ連れて行ってもらったのだと思います。この本との出会いをきっかけに、ジュール・ベルヌ作「地底旅行」「海底二万里」「八十日間世界一周」などの冒険小説や、江戸川乱歩作「怪人二十面相」「鉄塔の怪人」「海底の魔術師」などの推理小説の世界にのめり込み、胸を躍らせながら本に親しむことができました。今、こうして振り返ってみると、「読書が好きでなかった」のではなく、「読書の楽しさに出合っていなかった」ということだったのだと思います。

本校では、学校司書の須貝さん、図書ボランティアの方々が中心となって、星の子が素敵な本と出合えるよう「読書に親しみやすい図書室の環境づくり」など読書活動の推進にも力を入れています。星の子が夢中になって読むことができる本に出会い、本の世界を旅する経験をしてほしいと思います。